

玉野市埋蔵文化財発掘調査報告(1)

常山城跡  
常山城跡

1980. 3

岡山県玉野市教育委員会

# 序

本書は、玉野市胸上波張崎の波張崎遺跡と常山城跡の発掘調査報告書であります。波張崎遺跡は、縄文時代早期の押型文土器を出土する遺跡であり、学界におきましても周知の遺跡であります。

この波張崎遺跡につきましては、戦後まもなく調査がなされたことがあり、この時出土した尖底土器の完全なものが倉敷考古館に保存されております。

このたび北興化学株式会社の工場拡張計画により波張崎遺跡の一部を工場敷地として開発する旨申し出がありましたので、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、事前の確認調査を岡山県教育委員会文化課へお願いしました。

調査の結果は本文に詳しく記されておりますように、県下でこの時代の遺跡がこのような完全なる姿で保存されているところは珍らしく、貴重な遺産であります。

この調査の結果、北興化学株式会社には開発計画の変更をしていただき現在のところ保存されることになりました。埋蔵文化財の保存・保護にご理解を示されましたことに感謝いたすものであります。

常山城跡は、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所において無線中継所を増設するため遺跡発掘の届出があり、これも岡山県教育委員会文化課にお願いし発掘調査を行ったものであります。

どうかこの報告書が、地方史研究のうえで一資料として参考にしていただければと願うものであります。

終わりになりましたが、本発掘調査にあたり、ご協力を賜りました岡山県教育委員会文化課の方々、北興化学株式会社その他関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和55年3月

玉野市教育委員会

教育長 竹 本 寿美男

## 〔5〕常山城跡発掘調査報告

## 例　　言

1. これは、建設省常山無線中継所増築工事に伴い、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所の委託を受けて実施した、玉野市宇藤木に所在する常山城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和54年12月13日から12月26日まで実施し、文化課職員岡本寛久が担当した。
3. 本報告の作成・執筆・編集は岡本が担当し、遺物写真は文化課井上弘、拓本は北村智子氏の協力を得た。
4. 実測図中の高度値はすべて海拔高、方位は第1図～第3図が真北、他は磁北である。
5. 第1図は建設省国土地理院発行の25000分の1地形図(八沢)を複製したものである。
6. 出土した遺物、写真、図面類はすべて文化課分室(岡山市西吉松)に保管している。

## 目 次

1. 地理的環境 .....	169
2. 調査の経過 .....	170
3. 調査の結果 .....	172
4. ま と め .....	177

## 挿 図 目 次

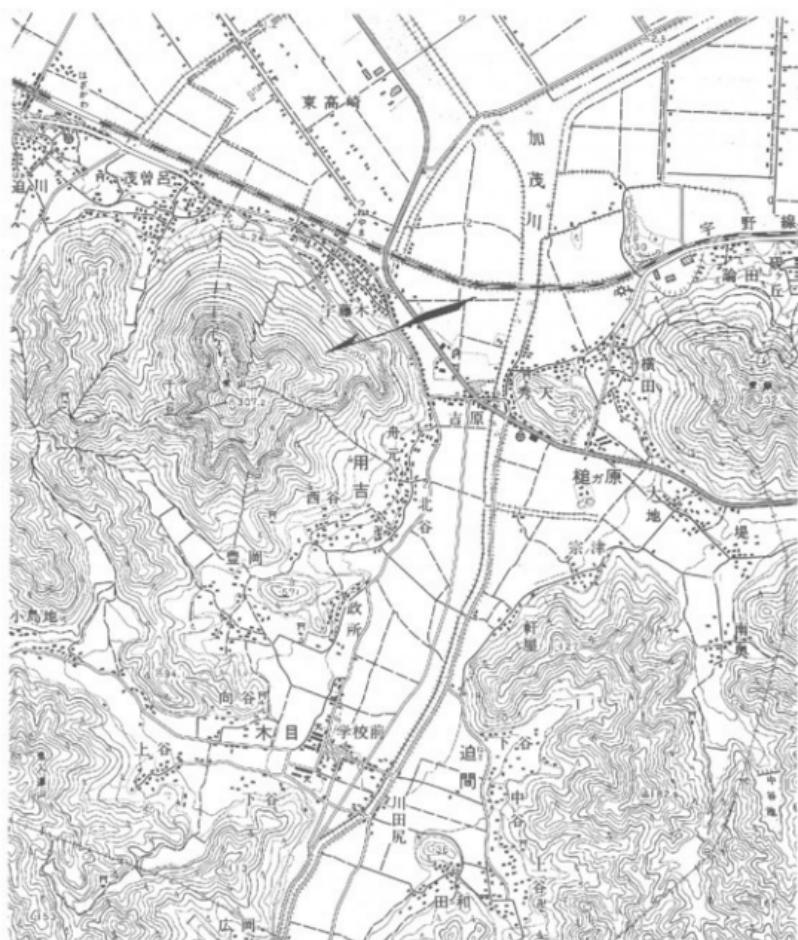
第 1 図 常山城位置図 ( S = 1 / 25000 ) .....	169
第 2 図 常山城地形図 ( S = 1 / 10000 ) .....	170
第 3 図 常山城城郭図 ( S = 1 / 400 ) .....	171
第 4 図 発掘調査区位置図 ( S = 1 / 300 ) .....	171
第 5 図 調査区遺構検出状況平面図 ( S = 1 / 80 ) .....	172
第 6 図 建物址実測図 ( S = 1 / 80 ) .....	173
第 7 図 配石土壙実測図 ( S = 1 / 30 ) .....	174
第 8 図 出土瓦実測図 ( S = 1 / 4 ) .....	175
第 9 図 出土土器実測図 ( S = 1 / 4 ) .....	176

## 図 版 目 次

図版 1	1. 常山城遠望 ( 北から ) .....	179
	2. 表土除去後遺構検出状況 ( 南から ) .....	180
図版 2	1. 調査区全景 ( 南から ) .....	181
	2. 建物址柱穴列 ( 南から ) .....	182
図版 3	1. 配石土壙 ( 西から ) .....	183
	2. 同上 ( 南から ) .....	184
図版 4	出土遺物 .....	185

## 1. 地理的環境

常山城は児島半島の西半、由加山を中心とする丘陵地帯の北東端に突出した常山の頂上に築かれている。この丘陵地帯の東には現在加茂川の流れる地溝帯があり、児島半島東半と分断される。北辺は児島湖に面し、その縁辺部を国鉄宇野線が走っている。現在広大な干拓地が広がるが、かつては丘陵



第1図 常山城位置図(矢印) (S = 1 / 25000)



第2図 常山城跡地形図 ( $S = 1/10000$ )

極まで彼が打ち寄せていたことであろう。常山は海拔 307m である。その北半分の眺望はきわめて良好であり、岡山・倉敷・総社の平野部を一望のもとにおさめることができる。山腹斜面はかなり急峻であり、海拔 5・6m の山裾から一気に頂上まで駆け登る。丘陵頂部には最高部から北と北東へ伸出した痩せた尾根がある。この尾根筋を整形し、築城している。北へ伸出した尾根の先端には小面積の平坦部がある。現在海拔 270m を測る。

常山城は城郭構造から言えば連郭式山城であり、最高所と二本の尾根筋に郭が連続してつくられている。最高所には本丸があり、北方向の尾根の先端に梅尾丸、北東

方向の尾根の先端に惣門丸があり、本丸と梅尾丸、本丸と惣門丸の間には大小の郭がある。郭は全部で 15 あり、このうち木丸・梅尾丸・惣門丸・兵庫丸は石垣構築である。

## 2. 調査の経過

常山山頂はその地理的環境から電波中継地として良好な条件を備えているため、現在種々の電波施設が山頂に設けられている。北方の尾根の先端には電電公社の通信施設があり、これと本丸のある最高所との中間点にはテレビ中継施設がある。今回の調査の契機となった建設省常山無線中継所は本丸のすぐ東にある東二の丸に建設されている（第2図の矢印）。この中継所は昭和41年に建設されたものであるが、本丸より一段低い部分に位置するため、本丸の影響もあり送受信にやや難があった。このため建設省では現在の施設を倍の規模に拡大し、中継アンテナをより高くして、送受信の完全を計るとともに、また増大する情報の適切な処理を図ることとした。

ところが、既存施設は東二の丸にあるため、文化財保護の上で問題が生じることとなった。この種の山城については近年ようやく調査の手が及ぶようになったが、まだその実態については不明な点が多いため、県教育委員会ではとりあえず確認調査を実施することとした。しかし、既存施設は郭の中央部にあるため、遺構の主要部分は既に破壊されており、また施設の公共性からも、もし遺構が確認されても記録保存の措置を執らざるをえないと判断した。

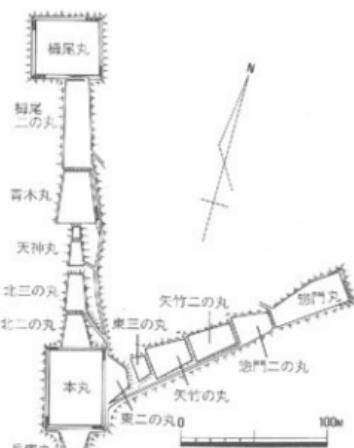
発掘調査は工事によって掘穿される部分全面について実施した。調査区は既存施設の正面に位置しており、アスファルトによる簡易舗装がなされ、門の部分にはコンクリート床があった。これらを壊したことろ、薄い盛土層が検出された。この層は昭和41年の建設にあたって敷かれたもので、その下に旧表面が削平されることなく保存されていた。この旧表面土層を除去した段階で調査区西半では地山の岩盤が露出し、そこに柱穴と配石遺構が確認された。東半は人為的な造成がなされていた。柱穴がこの面の上で検出されたことから、これは築城時の造成と考えられる。配石遺構は土壠を伴っていた。

柱穴と配石土壠の他には遺構は検出されなかった。これらの遺構を掘り上げた後、造成層を除去して全面地表面を露出させたが、他に遺構はなく、これもって調査を終了した。

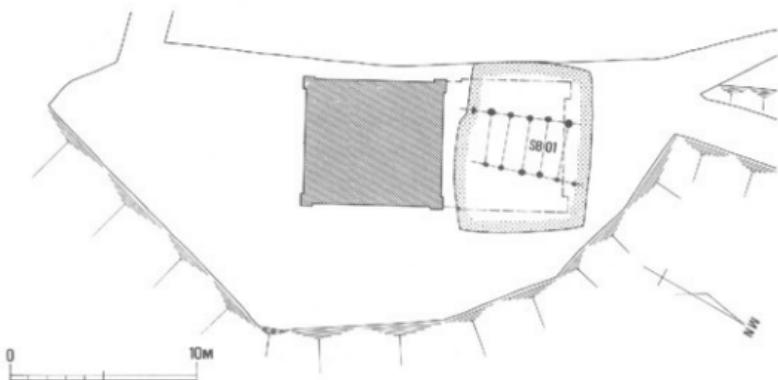
発掘調査にあたっては下記の作業員の方々のお世話になった。厚く感謝します。また株式会社難波組課長 守屋佳昭氏にも深謝します。

#### 作業員氏名

多田富夫 山本昭二 赤木孝子 岸田麗子 難波豊子 東馬金三郎  
難波始章 滝手澄夫



第3図 常山城郭図 (S = 1/400)  
(『日本城郭大系』13による)

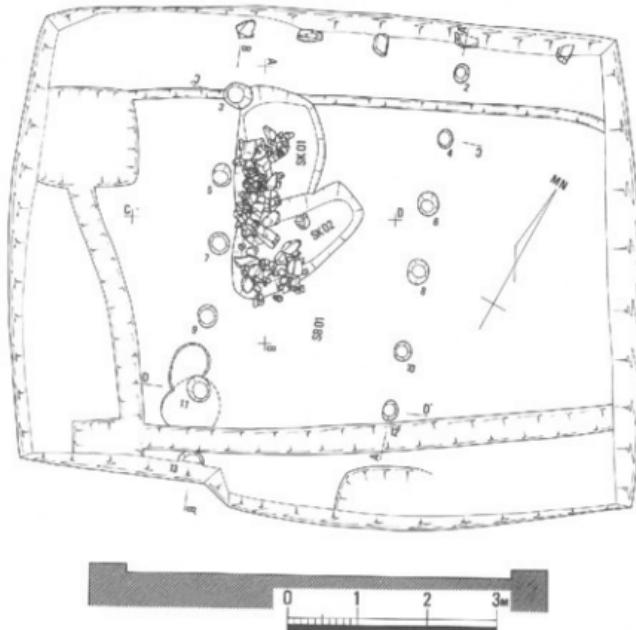


第4図 発掘調査区位置図 (S = 1/300)

### 3. 調査の結果

発掘調査区は第4図のとおり東二の丸の北半部分にあたり、東西9m、南北6mの約54m<sup>2</sup>である。調査区最上部はアスファルト舗装面であるが、その下は4層からなっている。第1層は昭和41年の工事の際に形成された盛土層である。この層が遺跡の保護を目的として敷かれたものかどうかははっきりしないが、旧地表面の上に人为的に盛られたものである。多量のコンクリートがらや炭を含んでいた。なお、昭和41年度の工事にあたっては文化財行政の対応として立会調査がなされ、瓦片等が採集されたという。

第2層以下が城跡における本来の堆積層である。第2層は旧表土層である。暗灰茶褐色の土である。炭を多く含み、瓦片をかなり包含していた。またビール瓶・ビニール袋等現代のものまでみられた。第3層は暗灰黄色土層である。わりに均質なやや粘性の土である。瓦片を包含しているが、第2層ほど多くない。また備前焼片もこの層から出土した。叩締めたような痕跡はみられず、またかなりの遺物を含むことから築城以降の形成層とみられる。第3層の下は調査区の西半ではすぐに地山となるが



第5図 調査区造構検出状況平面図 ( $S = 1/80$ )

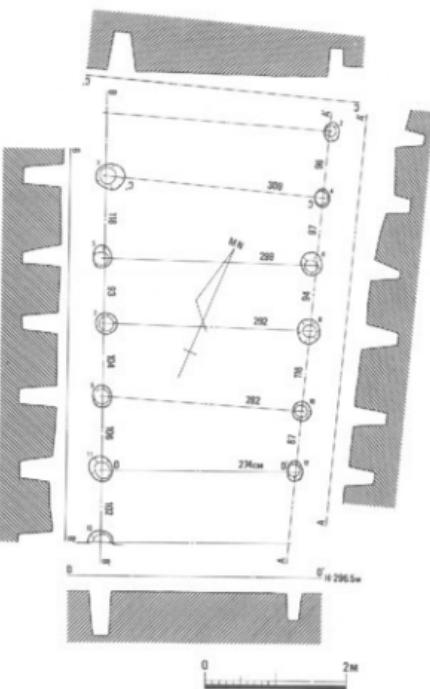
東半ではもう一層の堆積がみられた。それは地山の岩盤の碎粒とみられる砂利を多量に含んだ砂礫土とでもよぶべき土からなっている。瓦が1・2片採集されたのみであった。この層の上面は地表面が東へ下がるのに対して水平面を保っており、平坦面の形成を目的として人為的に造成されたものである。後述する建物址の柱穴がこの層の上面で検出されていることから、この層は東二の丸の造成の際に形成されたものと考えてよい。地山の碎粒を多量に含んでいることから、東二の丸の造成にあたっては、山の斜面をかなり掘削していることが考えられる。このことは、東二の丸と東三の丸の間がかなりの落差をもっていることから、東二の丸の部分の旧状は單なる山稜の傾斜面ではなかったかと考えさせるのである。

発掘区の土層堆積状況は以上のようなものであった。

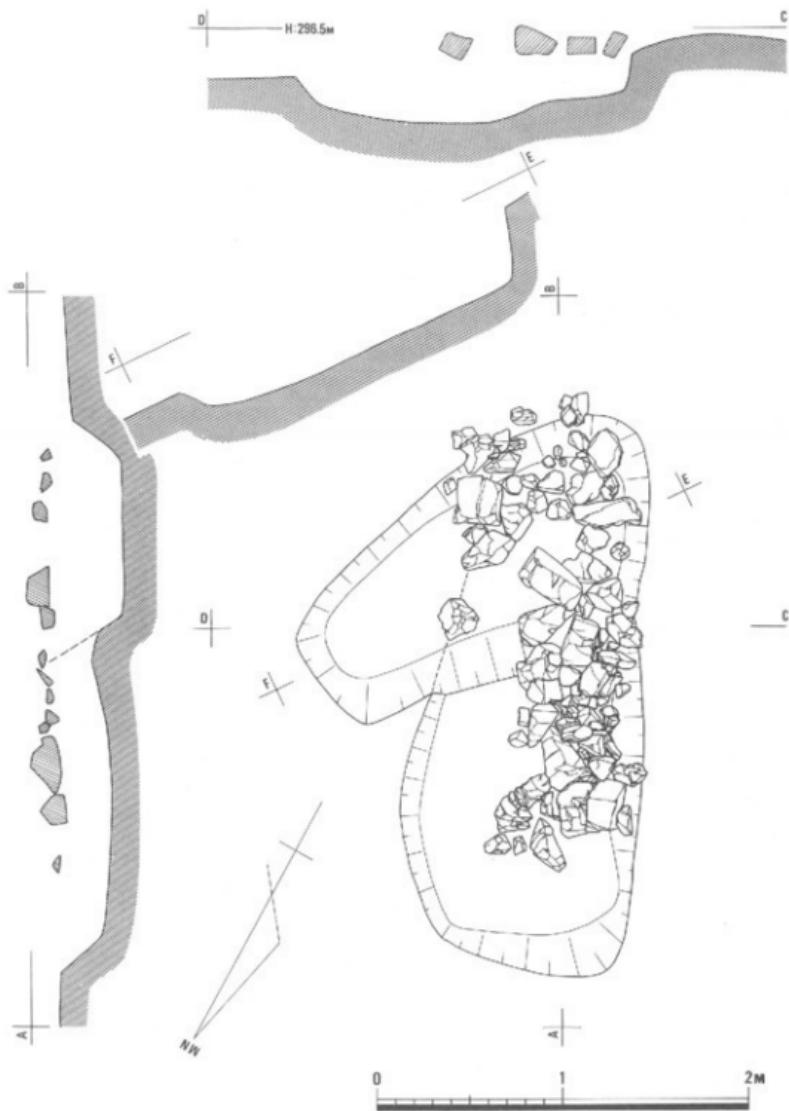
発掘調査によって検出された遺構は建物址1棟(SB 01)と配石土壙2基(SK 01・SK 02)である。なお、第5図の他の溝状あるいは土壙状の遺構はすべて現在の無線中継所に伴う電柱および電線ケーブル埋設溝である。

建物址(SB 01)は調査区の中央部で検出された。獨立柱建物である。2基の柱が対になり6間分が確認された。棟の方向は北北西—南南東であり、東二の丸の本来の西壁に平行しているとみられる。調査区外にも伸びる可能性が高いが、北については必ずしも断言できない。柱穴は大きなもので径40cm、小さなもので径25cm程度であり、深さは検出面から深いもので60cmあるが、平均すれば50cmぐらいのものである。底の高さは一様でなく、対になるものでも20cm程の差のあるものがみられる。第6図にみるように、梁行の柱間は北へいくほど広くなっているため、東側と西側の柱穴列は平行しない。また桁行の柱間もきわめて不規則であり一定していない。しいて平均すれば101cmとなる。この建物はかなり長いものになりそうであるが、その特徴を一言で言えば不規則ということになろう。柱間・柱穴規模にまったく規格性がないということはこの建物の性格を考える上で重要であろう。

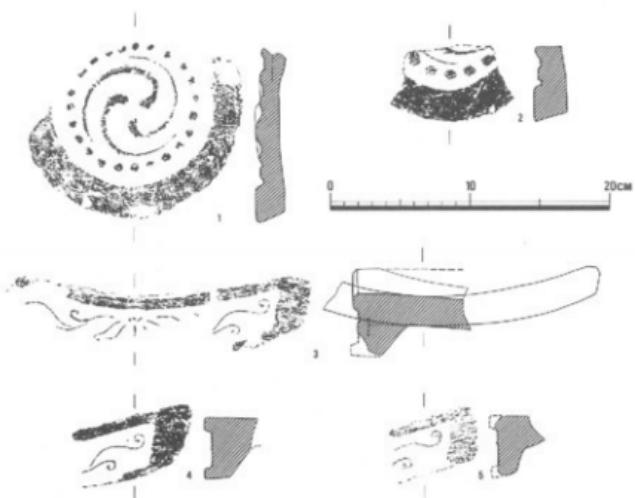
配石土壙が2基(SK 01・SK 02)検出された。位置は建物址の中央より西へ少し寄ったところで



第6図 建物址実測図 ( $S = 1/80$ )



第7図 配石土塁実測図 ( $S = 1/30$ )



第8図 出土瓦実測図 ( $S = 1/4$ )

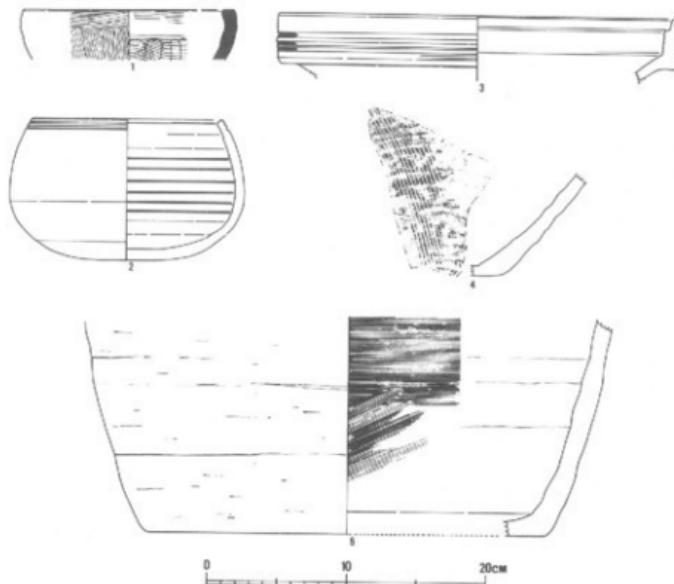
ある。しかし土壇は建物址の柱穴を明らかに切っているため、建物址より後の遺構である。土壇どうしも切合っている。切合の関係は明瞭には確認されなかったが、配石のあり方から考えて、SK01がSK02を切っているとみ

られる。配石はいずれもSK01に伴うものと思われるが、切合の関係が明瞭でなかったのと南端の配石がやや広がっていることから、その一部がSK02のものである可能性もまったく否定はできない。土壇はいずれもかなり不整形な形状を示す。底面はSK01は中央がやや凹み、SK02はほぼ平坦である。その規模は、切合の関係が第7図の破線のようだとすれば、SK01は長径3m、短径1.3m、深さ0.3mとなり、SK02は長径2m程度と推定される。深さは0.35mである。配石の石材は常山の産とみられる。この土壇の性格が問題となるが、類例から考えて墓壇とするのが妥当なようである。ただそうした場合、これだけある空間にたった2基しかないのに、それが切合しているということは、この両者の間の時間的な差をかなりのものと考慮する必要があるのではないかろうか。どちらの土壇からも遺物の出土はみなかったが、いずれにしても、配石土壇がつくられたのは廃城のことであろう。

なお、調査区の北辺で列石が検出されたが、その上面の高さは一定せず、かなり差があり、一つの建物の礎石群とはみられない。

発掘調査によって出土した遺物は瓦と土器類である。量的には瓦が圧倒的に多い。整理箱5箱程度である。遺物が出土したのは第1層の現中庭所建設時の盛土層と第2層の旧表土層からが多く、ついで第3層の暗灰黄色土中からである。遺物については詳細な整理がまだできていないので、概略に止める。

瓦は大部分平瓦であったが、丸瓦もみられ、軒丸瓦片が3点採集された。平瓦はその風化度に差がみられ、いくつかに分けられる可能性があるが、埋没状況の相違による差も考えられる。軒丸瓦は巴文である。中心に三つ巴を配し、まわりに珠文をめぐらせる。外縁は素文でかなり幅がある。巴は頭



第9図 出土土器実測図 ( $S = 1/4$ )

部はあまり大きくなく、丸味に欠ける。尾部はかなり長く半周している。珠文は23個で正確には割付けられていない。瓦当裏面はナデによって調整されているが、指頭圧痕を残しており、やや粗い仕上げである。復原径150mm、厚さは外縁20mm、中央12mmである。胎土は緻密であるが、細砂を含んでいる。色調は灰色から暗灰色を呈する。軒平瓦は瓦当面で弦長約350mm、幅約40mmを測る。文様区は左右両端でかなり縮小し、弦長210mm、幅25mm程度とみられる。文様は均整唐草文である。中心飾は上部に珠文を3つ置き、下に笠葉状のものをやはり3つ配す。珠文は中央がひとまわり大きい。見ようによつては笠葉型の紋とも考えられるが明確でない。単なる花文の可能性もある。唐草は流麗繊細で藤手状に強く巻き込む。出土した三片はいずれも同一文様である。胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや甘い。風化がかなり進行しているためか瓦質という感じは受けない。色調は淡灰茶色を呈する。

採集された土器片は半数以上が明治以後の現代品であったが、なかには江戸以前とみられるものがあった。そのうち5点を第9図に示した。1は土師器であるが、2～5は備前焼である。1の碗は口径132mmを測る。内外面ともハケによる調整を行っている。口縁部は横、胴部は縱方向である。内面胴部には指頭圧による痕跡を残している。胎土には多量の砂粒を含んでいる。焼成は不良で甘く、色調は黒色を呈している。2は鉢である。その形態からして日常雑器よりは特別な用途に用いられたのではないかと考えられる。外面口縁端に2条の笠摺沈線を施す。胴部下半に笠削りを行い、その後

ナデによって仕上げている。全体はロクロによるナデで調整し、内面には砂粒の移動痕が浅い沈線状になり規則的にめぐる（ロクロ目）。胎土は砂粒を含むが全体に精良・緻密であり、焼成良好で、色調は暗褐色を呈する。底部には重焼きの痕跡があり、同様のものをいくつも積重ねて焼成したものとみられる。3はすり鉢である。口縁端は高く立上がり、先端は内面に段をもって薄くなる。口径は283mmと復原される。口縁部外面の中央から下半にかけて4条の箒描沈線をめぐらせる。胎土には砂粒を含み、石粒も若干みられる。焼成は良好で堅緻である。色調は外面灰紫色、内面は暗褐色である。4もすり鉢である。内面には一單位12条の箒描（卸し目）を間隔をおいて施している。内外共にロクロによるナデで調整しているが、外面にはナデ上げた痕も認められる。器面はかなり凹凸をもっている。胎土には砂粒を含む。焼成は良好で堅緻、色調は赤褐色を呈している。5は壺の底部である。外面はヘラ削りした後でナデによって調整している。内面にはきわめて細かい条痕がみられ、板状工具によって調整されている。ただこの調整は下端にまでは及ばない。粘土紐の痕跡を内面に認めることができる。底径は283mm程度と推定される。胎土には砂粒を多く含み、大きな石粒を若干含む。焼成はきわめて良好で堅緻であり、色調は赤褐色を呈する。

第8図・第9図で図示した遺物はほとんど第1層・第2層出土であり、第9図2はその1部が第3層から出土している。遺構に伴うかとみられるのは第9図5であり、建物址の11の柱穴の周囲のごく浅い落込みから貼付いたような状態で出土した。

#### 4. まとめ

常山城に関する歴史ならびに構造については最近刊行された『日本城郭大系13 広島・岡山』に詳述されている（註1）。詳しくはそれに譲るとして、考察上必要な時代変遷について要約しておきたい。築城は文明年間（1469～87）と考えられ、城主は国人の上野氏とされる。上野氏は天正3（1575）年、世に有名な常山合戦において毛利氏に滅ぼされる。次いで宇喜多直家の家臣であった戸川秀安が城主となり、天正4（1576）年から慶長4（1599）年まで居城した。関ヶ原の戦（1600）の後備前守となった小早川秀秋の家臣伊岐真利が城主となつたが、慶長8（1603）年、小早川氏の断絶により備前藩主となった池田忠繼は常山城を廃城とし、その資材は下津井城の大改築に活用された。したがって常山城の歴史はその城主によって三期に分かたれる。すなわち、上野期（1469～1575）、戸川期（1576～1599）、伊岐期（1600～1603）の三期である。このことを念頭に置きつつ、以下考察を進めていきたい。

まず出土品の年代について考えてみたい。瓦については当時代の発掘例が僅少であり、比較する材料に著しく欠ける。軒丸瓦の文様はきわめて普遍的なものであり、細かい年代比定は困難である。軒平瓦についても、文様については類例を知らない。軒平瓦の頸は平瓦との接合部分に付加された粘土が厚く、頸自体の突出は低いため、断面台形を呈する。これに対し、岡山市富山城（註2）出土の軒平瓦の頸はかなり突出する割には薄いものがあり、それらの断面は長方形に近い。このように軒平瓦の頸の形状からみれば、常山城のそれは富山城のものとは若干異なるようである。常山城の軒平瓦と形態的に類似したものに、管見に触れた範囲では和気郡佐伯町天神山城跡（註3）出土のものがある。

この資料は公開されていないが、文様はやはり唐草文である。しかし、肉厚く、常山城のものに較べればやや流麗さを欠く。ちなみに、富山城のものは浮田期（1568—1600）の所産であり、天神山城は1532—1577の間機能している。

備前焼の年代については、すり鉢の口縁部から判断すれば間壁忠彦・歳子氏の編年（註4）の第V期、大窯期の所産とみられる。第9図5の壺の内面はきわめて目の細かい板状工具によって丁寧に調整され、腹部外面には継方向のヘラ削りを認めない。同図2の鉢は特異な形態であり、大窯期における形態の多様化を反映している。岡山県立博物館蔵品の中にこれと類似した口縁をもつ平片口がある（註5）。茶陶との関連を考慮すべきかと考える。以上のように僅かな資料ではあるが、備前焼の示す年代は16世紀後葉の安土桃山時代と考えられる。

遺物から得られた年代観は16世紀後葉である。先の時期区分から言えば、上野期末から戸川期にかけての頃である。瓦と土器は共に遺構検出面直上の第3層から出土していて、第9図5の壺は遺構面に貼付いていた。このようなことから考えれば、東二の丸の構築は第2期の戸川期ではないかと考えられる。

戸川期は天正・文禄・慶長年間であるが、戸川氏の主君である宇喜多氏は天正7（1579）年、毛利氏に叛旗を翻し、織田信長に組することとなる。このため毛利氏は宇喜多氏討伐に乗り出し、天正8年、岡山城攻略のための陽動作戦として常山城を攻撃したが失敗に終わった。さらに同9年、毛利氏は織田氏の中国征討の機先を制すべく、児島半島北部に侵攻し、再度常山城攻略を図ったが、宇喜多氏側の奮戦により撃退された。同10年に至って本能寺の変が勃発し、これによって羽柴秀吉と毛利氏の和睦がなり、以後中国地方は平定化に向う。このような歴史的背景を考えると、天正7年から同10年にかけて常時戦争状態にあったわけであり、この期には城の修理・補強を目的とした改築が盛んになされたものと考えられる。ここで建物址の柱穴の在り方を考えれば、それが規格性をもたない、いわばかなりでたらめなものであることから、その建物が、据立柱であることからももちろんだが、まったく恒常的なものではなく、その場しのぎ的な要素がきわめて強いと考えられる。このことは常時戦争状態であったという状況とよく符号するように思われる。建物址は1棟のみで建替えはなされていない。これらのようなことから考えても、東二の丸の構築は戸川期、それも天正7年～同10年までの間である可能性が強いと考える。建物もまた同時に建築されたものであろう。

なお、たった2例との比較だけで判断するのはかなり問題であるが、軒平瓦は富山城よりは古相を示しているようにもみられる。東二の丸には建物址が1棟あるのみなので、瓦は当然本丸構築物に伴うものである。常山合戦にあたって城が炎上したものかどうか、今後瓦をさらに詳細に検討することによって判断されるであろう。現段階では、城の大部分が戸川期のものであるとする出宮徳尚氏の考え方（註6）は首肯されうるようである。

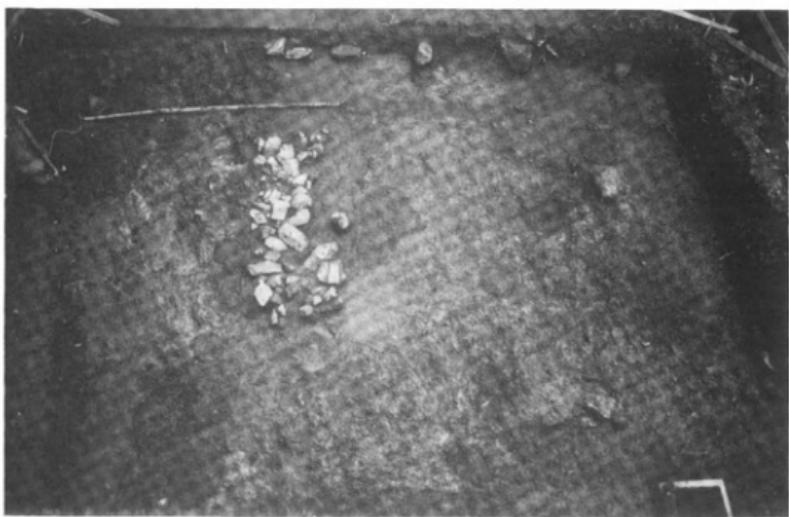
（註1）出宮徳尚「常山城」『日本城郭大系13 広島・岡山』新人物往来社 1980年1月  
（註2）嚴津政右衛門・水内昌康・出宮徳尚「富山城跡 第2次調査報告」『岡山市教育委員会1959年3月』  
（註3）出宮徳尚「天神山城」『日本城郭大系13 広島・岡山』新人物往来社 1980年1月  
（註4）間壁忠彦・間壁歳子「備前焼研究ノート(1)・(2)・(3)」「倉敷考古館研究集報』1・2・5  
1966年3月・11月, 1968年10月

（註5）伊藤晃・上西節雄「日本陶磁全集10 備前」中央公論社 1977年6月 図版番号72

（註6）註1に同じ



I. 常山城遠望（北から）

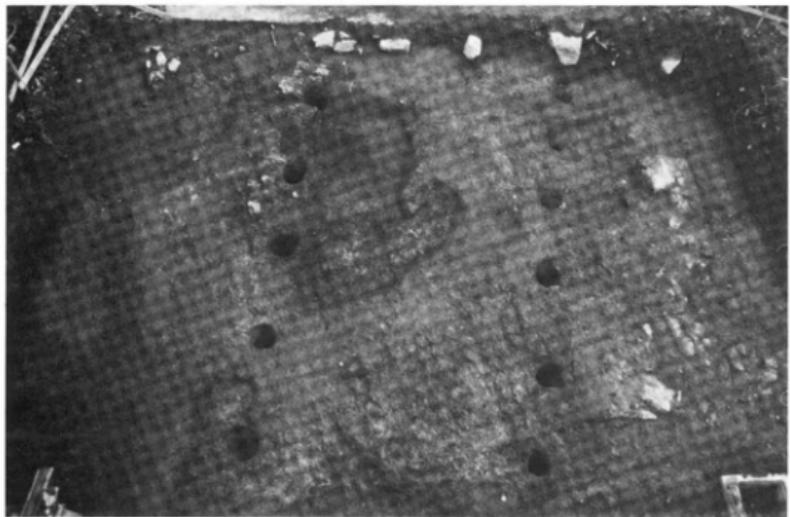


2. 表土除去後遺構検出状況（南から）

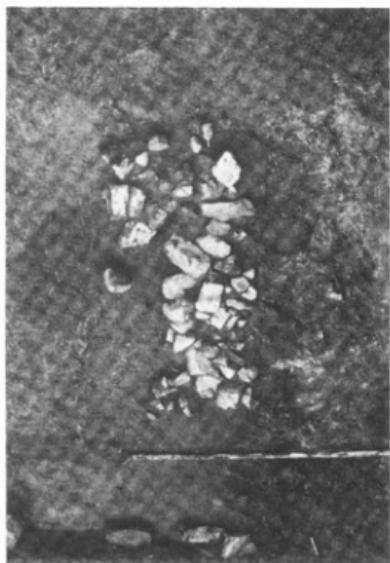
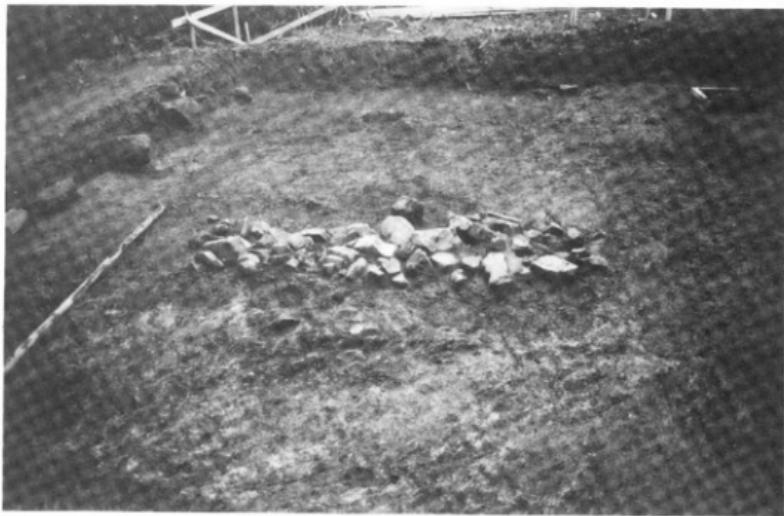
図版 2



1. 調査区全景（南から）



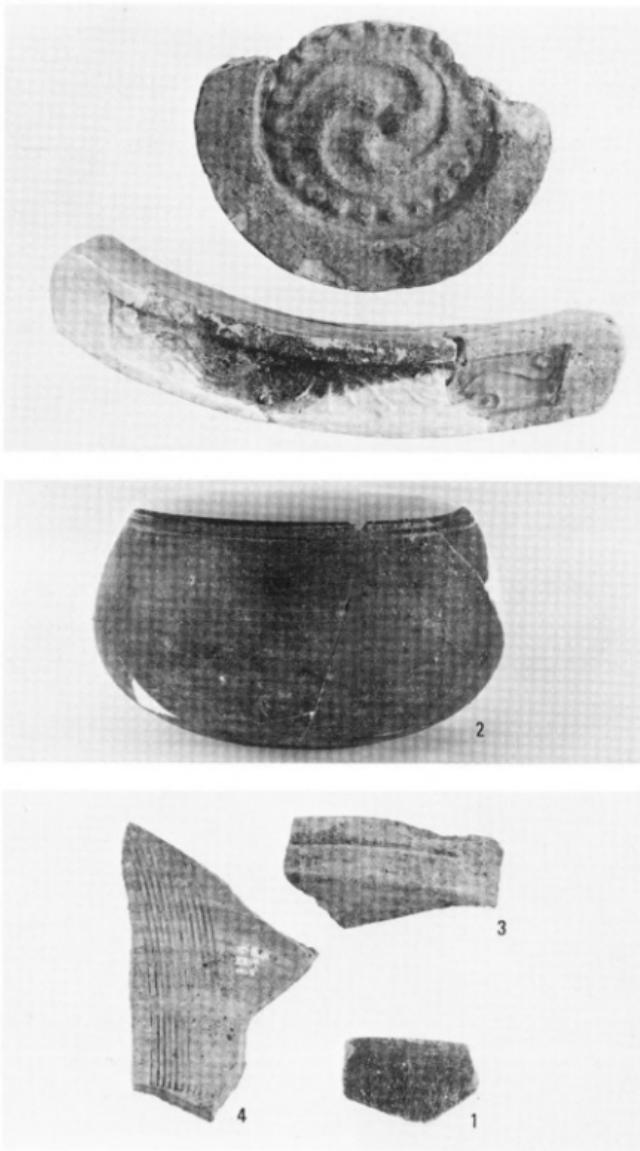
2. 建物址柱穴列（南から）



1. 配石土壙（西から）

2. 同 上（南から）

图版 4



出土遗物

## 〔6〕玉野市波張崎遺跡確認調査報告



## 例　　言

1. この報告書は、岡山県教育委員会が実施した「民間開発計画に伴う確認調査」の概要である。
2. 遺跡は玉野市胸上波張崎に所在する。

ごきげん

3. 確認調査は平井勝が担当し、1979年10月8日より10日まで実施した。

また確認調査にあたっては玉野市教育委員会をはじめ、玉野市文化財保護委員、北興化学株式会社等関係各位より協力を得た。記して感謝の意を表します。

4. 遺物整理は文化課分室において平井勝が行った。

なお出土遺物は玉野市教育委員会が保管している。

5. 報告書の執筆は平井勝が行った。

なお遺物整理・報告書の作成にあたっては高田明人（広島大学）をはじめ下記の方々の協力を得た。

藤井守雄、山本悦世



## 目 次

第Ⅰ章 調査の経過と遺跡の位置 .....	189
I 調査の経過 .....	189
II 遺跡の位置 .....	190
第Ⅱ章 遺 跡 .....	191
第1節 磐 群 .....	191
第2節 出土遺物 .....	192
I 土 器 .....	192
A 表土層出土の土器 .....	192
B II層出土の土器 .....	192
II 石 器 .....	196
第Ⅲ章 結 語 .....	197
I II層出土の土器について .....	197
II 磐群と遺跡の立地 .....	202
III 濑戸内海沿岸部の遺跡群 .....	202

## 図 目 次

第1図 遺跡の位置 .....	189
第2図 遺跡の地形とトレンチの位置 .....	190
第3図 トレンチ平面図・断面図 .....	191
第4図 表土層出土の土器 .....	193
第5図 II層出土の土器(1) .....	194
第6図 II層出土の土器(2) .....	195
第7図 石器 .....	196
第8図 岡山県の縄文時代早期遺跡分布図 .....	203

## 表 目 次

表1 文様別数量表 .....	192
-----------------	-----

表 2 岡山県の縄文早期土器編年表 .....	198
表 3 類別対比表 .....	201

### 図 版 目 次

図版 1 1. 遺跡の遠景(西南から) .....	205
2. 遺跡の遠景(北東から) .....	205
図版 2 1. 遺跡の近景(東から) .....	206
2. 遺跡の近景(西から) .....	206
図版 3 1. トレンチ断面(北西から) .....	207
2. トレンチ全景(南東から) .....	207
図版 4 1. 磚群2(北東から) .....	208
2. 磚群1(南東から) .....	208
図版 5 1. 表土層出土の土器 .....	209
図版 6 1. II層出土の土器(1) .....	210
図版 7 1. II層出土の土器(2) .....	211
図版 8 1. 石器 .....	212

# 第Ⅰ章 調査の経過と遺跡の位置

## I. 調査の経過

縄文時代早期の遺跡は瀬戸内海周辺あるいは島嶼部に多く分布している。玉野市波張崎遺跡もこうしたものの一つで、小規模な貝塚を伴う遺跡として古くより注目されていた。遺跡は海に面した台地上に位置するが、その東側には北興化学の工場が建てられている。ところが工場を一部拡張する計画が申請され、その計画区域内に遺跡が一部係ることとなつた。岡山県教育委員会と玉野市教育委員会は昭和54年10月3日現地を訪れ、現状を観察するとともに北興化学と保存の協議を行つた。その結果一応確認調査を実施して、遺構・遺物が発見された時は別途協議をするということになった。

確認調査は平井勝が担当し、昭和54年10月8日より10日まで実施した。調査にあたつては玉野市教育委員会、玉野市文化財保護委員、北興化学等関係各位から協力を得た。記して感謝の意を表します。



第Ⅰ図 遺跡の位置 (●印 確認調査の地点)

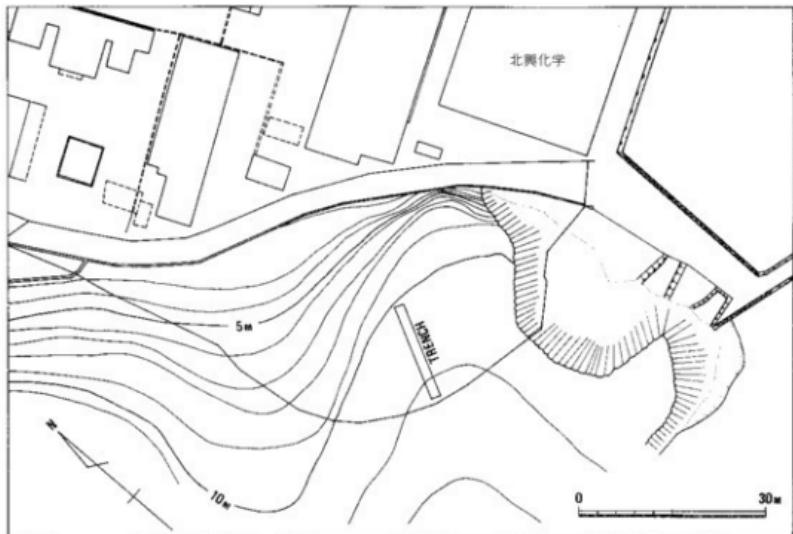
- |           |         |           |
|-----------|---------|-----------|
| 1. 波張崎遺跡  | 2. 坊子遺跡 | 3. 大入崎A遺跡 |
| 4. 大入崎B遺跡 | 5. 弦島遺跡 | 6. 弁天崎遺跡  |

## II. 遺跡の位置

遺跡は瀬戸内海に突出した児島半島の東南端、玉野市胸上に位置する。遺跡のある台地は北から突出した砂洲の先端にある。台地上は平坦になっており、北側は一部土取り等で破壊され旧地形を留めていない。平坦部は元は畠地であったが、現在はほとんど荒地となり草木が茂っている。このことが他の瀬戸内海周辺、島嶼部の花崗岩の露出した遺跡と異なり保存状態を良くしている。東北側には北興化学の工場があり、いずれはこの台地も破壊の危機にさらされる可能性が強く、早急に保護・保存の対策を講じる必要がある。

周辺には縄文早期の遺跡が多く認められる。特に児島半島の南側丘陵上、あるいは台地上には集中して認められる。波張崎遺跡はこの東端に位置し、古くから小規模な貝塚が知られていた。遺跡はこの貝塚を含む台地上一帯に広がっていると考えられる。遺跡の東側海中に浮かぶ坊子島からも押型文土器が採集されている。その北東部の海中に細長く突出した大入崎にも押型文土器が分布している。その北側にある鈴島遺跡でも押型文土器や石器が採集されている。さらにその北側の弁天崎においても押型文土器が採集されている。これらの遺跡はいずれも花崗岩バイラン土壤の上に形成されていることから、すでに流失してしまったものが多いと考えられる。

縄文時代早期以後の遺跡は周辺に全くなく、僅かに海岸沿に製塩遺跡が認められるにすぎない。



第2図 遺跡の地形とトレンチの位置

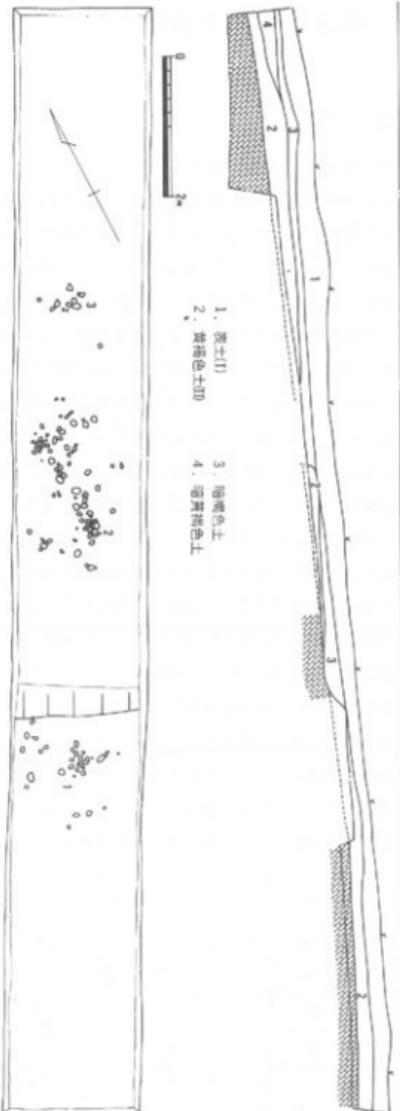
## 第II章 遺 跡

### 第1節 碓群

確認調査は台地上の約1000m<sup>2</sup>を対象に斜面に直行するトレンチを設定した。表土(Ⅰ層)には中世の土器片も含まれるが、早期の土器片を中心にサヌカイト片も出土した。Ⅱ層は暗黄褐色土で、早期の遺物と碓群が含まれる。このⅡ層を掘り込んだ階段状のものが認められるが、その時期については不明である。Ⅱ層の下部は遺物が少くなり、色調も多少変化しているので詳細に検討すれば2層に分離できる可能性もある。その下は花崗岩の地山となる。

碓群はⅡ層より検出された。碓群1は1.8m四方に点在するもので、大人の握拳大の円礫を約30個程度集めている。碓群2は二つに分離できるかも知れないが、2.6×1.4mの範囲に約90個程度の円礫を集めている。3は小規模で、0.4m×0.6mの範囲に認められる。

これらの碓群を構成する円礫は周辺に産出する石英質の石である。大きなものではなく大人の握拳大が最も多く、それ以下のものもある。焼けていると考えられるものが認められるが、石英質のため、肉眼でこれを判別することは困難である。礫は壊れたものは少ない。碓群内でのレベル差は少なく、ほとんど平面的で地層の傾斜にそって認められる。



第3図 トレンチ平面図・断面図

## 第2節 出土遺物

### I. 土 器

#### A 表土層出土の土器（第4図）

表土からは縄文時代早期の押型文土器、無文土器を中心に、若干の中世土器片が出土した。

1から7は押型文土器である。1は口縁部の破片で、表面には山形押型文を、裏面の口縁端には細い平行短線とその下に山形押型文を施している。器壁は6mmを測り、胎土に細砂粒を若干含み黄褐色を呈する。2は表面の磨滅が著しく文様の判別が困難ではあるが、山形押型文の可能性が強い。器壁は薄く、色調は赤褐色を呈する。3も磨滅が著しく文様は不明であるが、器壁が薄いことから押型文土器と考えられる。胎土に細砂粒を含み、赤褐色を呈する。4は表面に小さな楕円押型文が施され、内面は平滑に仕上げられている。胎土に砂粒を若干含み、淡黄褐色を呈する。5もやや粗雑な楕円押型文を表面に施している。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。6はやや粗雑な楕円押型文を表面に施している。軟質で、色調は赤褐色を呈する。7は口縁部に近い破片と考えられ、内外面ともやや粗雑な楕円押型文を施している。色調は淡赤褐色を呈する。

8・9は無文土器である。8は口縁部で、貼付の凸帯がめぐる。この凸帯は不鮮明ではあるが、手でつまんで刻目状にしたと考えられる痕跡が認められる。裏面には指頭圧痕が残っている。胎土に砂粒を多く含み、軟質である。色調は赤褐色を呈する。9は底部に近い破片で器壁は厚い。表裏とも指頭圧痕の凹凸が著しい。胎土に砂粒を多く含み軟質である。色調は赤褐色を呈する。

#### B II層出土の土器（第5・6図）

**押型文土器** 1から35までは押型文土器で、このうち1～6までが山形押型文、その他はすべて楕円押型文が施されるものである。

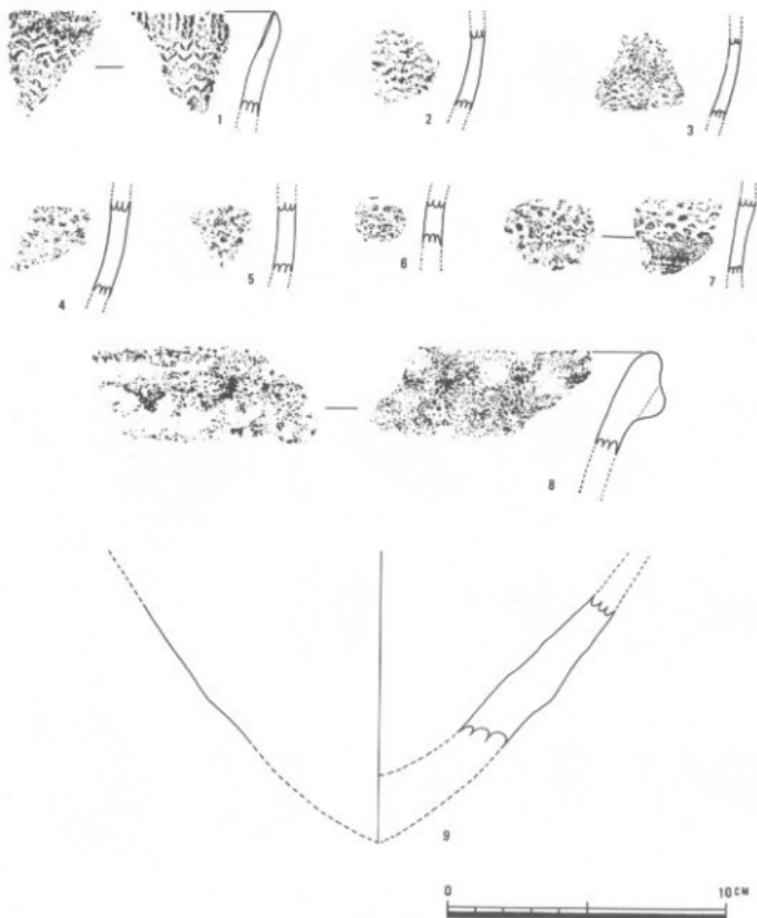
1は表面に波状の山形文が施され、裏面は平滑に仕上げられる。器壁は薄く、淡黄褐色を呈する。

2は表面にくずれた山形文を施している。3は磨滅が著しいが、山形文と考えられる。器壁は薄い。

5・6とも磨滅が著しいが、山形文と考えられる。

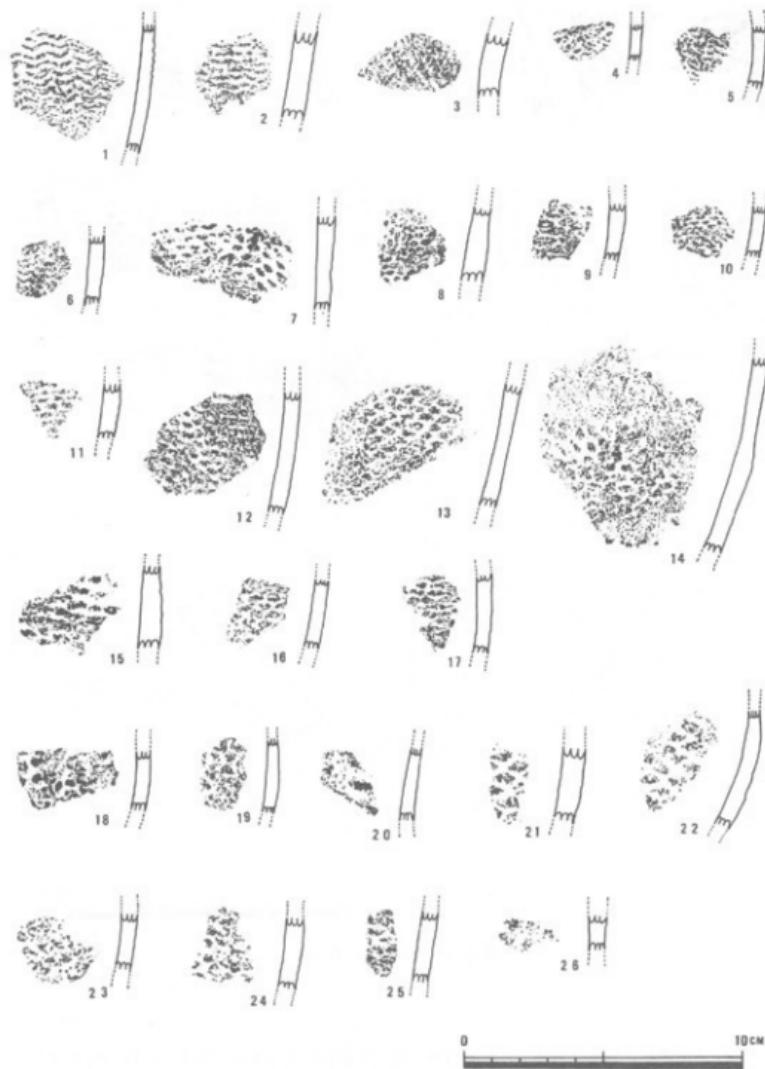
分類 層位	押型文		無文	計
	山形	楕円		
表土層	2	5	42	49
第2層	6	29	156	191
計	8	34	198	
	42		240	

表1 文様別数量表

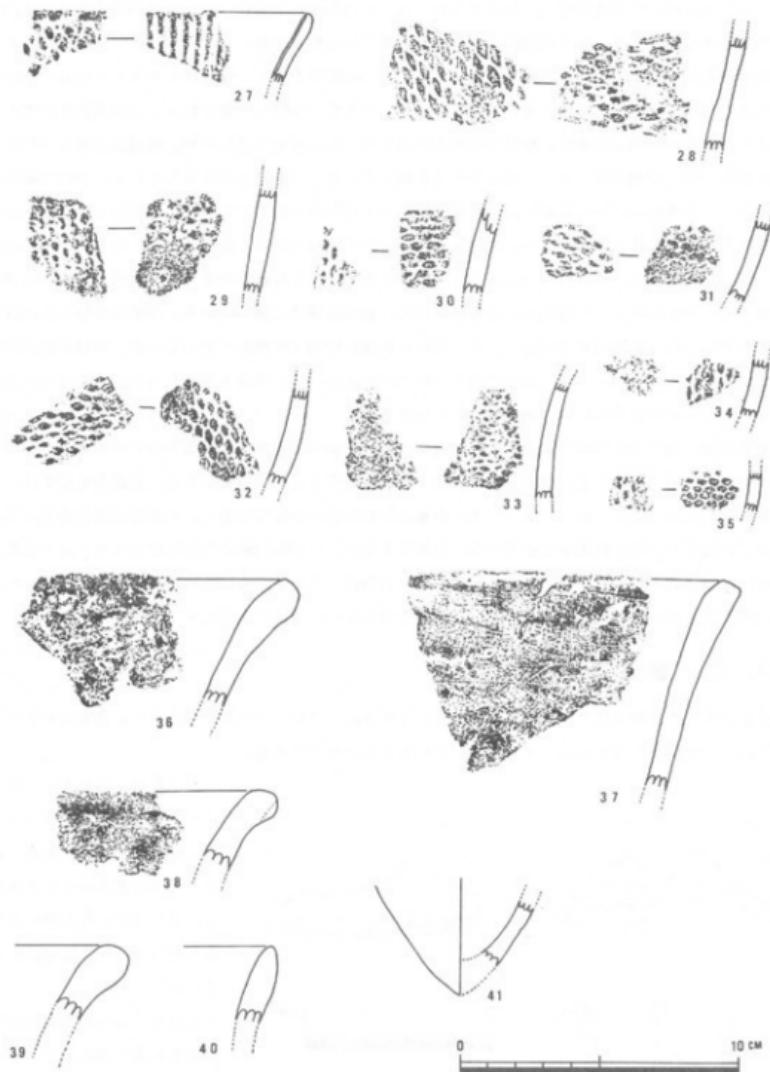


第4図 表土層出土の土器

7～35は楕円押型文が施される。7は米粒状の楕円が表面に施される。胎土に砂粒を若干含み、淡黄褐色を呈する。8はやや粗雑な楕円文が施される。9もやや大きな楕円文が施される。10は米粒状の楕円文を施す。11も楕円文で、胎土に砂粒を若干含み淡黄褐色を呈する。12は表面の磨滅が著しいが楕円文と考えられ、赤褐色を呈する。13は整然とした楕円文が施されている。色調は赤褐色を呈す



第5図 II層出土の土器(1)



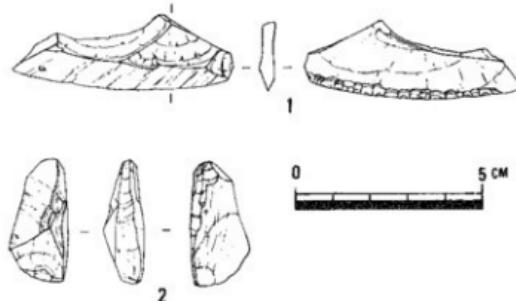
第6図 II層出土の土器(2)

る。14は表面にやや粗雑な楕円文が認められ、施文方向が上下で異なっている。赤褐色を呈する。15はやや粗雑な楕円文で、胎土に砂粒を多く含み、淡赤褐色を呈する。16はやや粗雑な楕円文である。軟質で赤褐色を呈する。18も粗雑な楕円文である。19は磨滅が著しいが楕円文と考えられる。20はやや大きな楕円文で、胎土に砂粒を若干含む。21もやや大粒の楕円文が施される。淡赤褐色を呈する。22もやや大粒の楕円文を施す。軟質で淡褐色を呈する。23は磨滅が著しいが、楕円文と考えられる。24も磨滅の著しい楕円文である。25は楕円文を施している。26も楕円文を施している。27は口縁部で表面にはやや大粒の楕円文を継位に、裏面には細い平行短線が施されている。黄褐色を呈する。28は表裏に整然とした楕円文が方向を変えて施される。胎土に砂粒を多く含み、軟質である。29も口縁に近い部分と考えられ、表裏に方向の異なる楕円文を施す。胎土に砂粒を多く含み軟質である。黄褐色を呈する。30も整然とした楕円文を表面は継位に、裏面は横位に施している。赤褐色を呈する。31は表裏で方向の異なる楕円文を施している。32は米粒状の楕円文を整然と施している。33は表面が磨滅しており文様が不明であるが、裏面は横位の楕円文が施される。35は丸みをもった小粒の楕円が施されるが表面は磨滅が著しい。色調は暗褐色を呈する。

**無文土器** 無文土器は押型文土器に較べ器壁が厚い。36は口縁部で、端部を凸帯状に肥厚させている。表裏に指頭圧痕による凹凸が著しい。胎土に砂粒を多く含み、硬質である。黄褐色を呈する。37も口縁端部を若干肥厚させている。胎土に多量の砂粒を含むが硬質である。色調は赤褐色を呈する。38は口縁端部を凸帯状に肥厚させている。赤褐色を呈する。39も口縁端部を肥厚させ丸くおさめる。40は口縁部を若干肥厚させるが、端部はやや尖りぎみにおさめる。41は底部に近い破片と考えられるが、押型文土器の底部が無文土器の底部かは断定できない。軟質で赤褐色を呈する。

## II. 石 器 (第7図)

石器は表土とⅢ層より一点ずつ出土したのみであるが、フレイクは多数出土した。通常認められる石礫は一点も出土しなかった。フレイクはすべてサヌカイトである。



第7図 石 器

1はⅢ層より出土したサヌカイト製のスクレイパーである。横長の剥片を使用しており、刃部は表面をそのまま残し、裏面は細かな調整により作り出している。左端は折れれている。

2は表土より出土したもので楔形石器に類似しているが上下両端よりの剥離が顕著でない。サヌカイト製である。

## 第III章 結語

### I. II層出土の土器について

#### A II層出土土器の特徴

II層より出土した土器は大別すれば押型文土器と無文土器とに分かれる。さらに押型文土器は文様だけで細分すると、楕円押型文土器と山形押型文土器とに分かれる。まずこれらの大別、あるいは細別された土器の占める割合であるが、無文土器は図示したものは少ないが、破片は多くあり、押型文土器の約5倍程度認められる。また押型文土器では山形文土器の占める割合は僅かで、楕円文土器が80%近くを占めている。

次に文様について整理しておく。押型文土器は山形文と楕円文以外認められなかった。山形文は山形と言ふよりゆるやかな波状をなし、横位に施すものが多く、口縁部内面には細い平行短線を施す。楕円文は米粒状の整然としたものと、多少丸みをもったやや粗雑なものが認められる。施文の方向は縦位と横位が認められ、表裏にある場合は表裏の方向が異なるものが多い。口縁裏面には細い平行線が施される。無文土器は表土より出土したものの中に口縁部に凸帯が貼付くものが認められたが、その他は口縁端部を肥厚させるものである。表裏には指頭圧痕による凹凸が著しい。

胎土は押型文土器に砂粒が少ないので対し、無文土器には多く含まれている。いずれも砂粒以外の混入物は認められない。器壁は押型文土器で4~7mm、無文土器は1cm内外を測る。色調は赤褐色、黄褐色を呈する。

以上土器の特徴を整理したが、これらは同一層のしかも比較的小範囲から出土していることから、同時期のものと考えられ、縄文時代早期の後半に位置するものである。

#### B II層出土土器の編年的位置

岡山県における縄文時代早期の研究は1930年代前半に黒島貝塚の押型文土器が学界に紹介されたことに始まる(註1)。これ以後1960年頃までに黄島貝塚の発掘(註2)を中心に瀬戸内沿岸島嶼部で押型文土器の発見があいつぎ、土器編年も大要が示された(註3)。これらの編年に対し、筆者はすでに考えを述べたが、ここでは波張崎出土土器の編年的位置を考えるにあたって必要な点を整理し記載する。竹田勝「岡山県における縄文時代早期について」異貌6 1977。

土器の分類については一応今日まで早期の土器とされているものを、文様を中心に胎土・器形などから五群に大別し分類を試みた。

第一群土器 これは押型文土器を一括したもので、文様によってさらにA~E類に分かれる。

A類 山形文を施したものと一括するが、口縁部内面に平行短線のないものと、施されるものがあり、前者をAa・後者をAbとする。

Aaは器表に整然と山形文が施され、口縁端部に刻目を施すものである。器壁は5~6mmが一般的

	山内 (註4)	鎌木 (註5)	鎌木・木村 (註6)	鎌木・高橋 (註7)	帝釈岐 (註8)
早 期	黒島	烟の浦?	烟の浦A?	烟の浦A?	馬渡4
		黄島式	黄島	黄島	観音堂20・21
		烟の浦	烟の浦B?	烟の浦B?	観音堂19 下
			羽島下層I?	羽島下層I (前期?)	観音堂19 中
前 期		羽島下層?	羽島下層II?	羽島下層II	観音堂18 D
					観音堂17 C
					観音堂17 B
					観音堂13

表2 岡山県の縄文早期土器編年表

である。波張崎出土(註9)のように内面にも山形文が施されるものも存在するが、これはやや後出的な要素と考えられる。底部はすべて尖底である。

Abも山形文を施すものであるが、内面に平行短線を有するもので、楕円文と組み合わさることもある。器壁5~7mmのものが多く、尖底をなす。

B類 楕円押型文を一括するが、楕円文にも米粒状の小さなものが整然と施されるものと、楕円文がやや粗大化し施文が乱れてくるもの、あるいは厚手で1cm以上もある粗大楕円文が施されるものがある。このような楕円文の大小、あるいは器壁の薄厚は器形の大小にも関係すると思われるが、これまでの調査例から時期差と考えられ、Ba・Bb・Bcとに分類した。

Baは米粒状の小さなものが整然と施され、口縁部内面には平行短線、あるいは同じ楕円文が横走するものもある。器壁は5~6mmで、尖底をなす。

Bbは楕円文の粗大化と施文の乱れ、それにやや器壁の厚みが増してきたものである。Bcへの過渡的なものと考えられ、帝釈岐馬渡3層上より出土したものがこれに相当するであろう。

Bcは高尾寺式(註10)と言われているもので、1cm以上もある粗大楕円文を施し、内面には斜行する太い沈線がみられる。器壁も1cm以上の厚いもので、若干の繊維を含むものも存在する。

C類 格子目文を一括する。出土例は少なく詳細は不明である。器壁は5~6mmのものが多い。

D類 その他の押型文で、銳角三角形を交互に組み合せ三角形内を斜線でうめる複合鋸歯文、あるいは菱形格子目の中に1粒ずつ楕円文がうめられるものなどが存在するが数は少ない。

E類 口縁部外面に突帯があり、その上に山形文や刻目が施される。内面にもゆるやかな山形文を横位に施している。器壁は5~6mmで繊維を含まない。

第二群土器 無文土器で、口縁端部が肥厚して丸みをもつものや、ただ単に丸くおさめるものなどがある。一般的に1cm以上の厚手のものが多いが、薄手のものもあり、薄手から厚手へと変化することが考えられる。内外面とも押えつけによる凹凸が著しく、概して粗雑な感じをうける。底部は尖底である。

第三群土器 燐糸文土器を一括する。細片のため詳細は不明であるが、回転によって施文したものと押圧によるものとが認められる。

第四群土器 繩文を施し、胎土に多量の繊維を含むものである。縩文は単節の斜縩文、羽状縩文などが施される。全体を知る資料はないが平底である。

第五群土器 内外ともに条痕による調整が著しいもので、胎土に多くの繊維を含む。器表には文表があるのかどうか不明である。器壁は厚手で尖底をなすものと考えられる。

さて次にこれら五群に分類された土器の共伴関係、あるいは前後関係を記すが、ここでは第四群以下は省略する。

第一群土器のAa類であるが、周辺地域の成果によってB類に先行することが知られている。岡山県においても、畠の浦遺跡では地点を異にして山形文だけの地点と、楕円文と山形文が混在する地点とが認められている（註11）。このことから鎌木は前者を畠の浦A、後者を畠の浦Bと命名し、押型文の細分を行った。しかし畠の浦遺跡での成果は、鎌木氏自身が文献において不確実なものとして記しているように（註12）、確実なものとは言えない。したがって県内においてはAaが単純に存在する時期がある可能性は少ないものと考えられる。

周辺地域を見ると、大阪府の神宮寺遺跡（註13）ではネガティブな押型文に伴って若干出土するが、楕円文は全く認められない。兵庫県別宮家野遺跡（註14）においても同じようなことが認められ、また広島県の帝釈峠御音堂19層下より出土した山形文は、矩形の押型文と組み合わさっているものであるが、楕円文は伴っていない（註15）。これらの山形文（Aa）は口縁部に刻目を施すものもあるが、黄島貝塚や黒島貝塚で一般的に認められた、口縁部内面の平行短線は施されない。したがって楕円文に伴出して、平行短線を施す山形文は新しい要素と考えられる。しかし楕円文に伴う山形文にも平行短線のないものもあり、一片一片では区別できない場合が多い。だがAaからAbへ変化することは言えるであろう。

B類は楕円文である。黒島貝塚（註16）などの調査によって、下層より上層の楕円文は粗大化し、器壁も厚くなることが確認されている。さらに和歌山県高山寺貝塚（註17）においてBcが純粹に出土し、楕円文の粗大化が著しいこと、胎土に少量の繊維を含むものが存在することなどから、楕円文の中では一番新しいものとされ、石山貝塚（註18）における層位関係から茅山上層式類似の土器群より古いことが確認された。

Bcは県内においては県北に多く認められ、南部ではBb段階以後遺跡は減少してゆき、Bc段階以後は全く遺跡が認められなくなる。

Baは黄島式（註19）と言われているものである。Bbは黒島貝塚の上層より出土し、下層のBaより新しいことが確認できる。

Bbは帝釈峠馬渡3層上、観音堂19層中より出土しているが、観音堂19層中ではBaと同一層位より出土しており（註20）、BaとBbとの時間的な差は少ないものと考えられる。Bcは観音堂19層上より出土しており、BaからBcへの変化が考えられ、Bbはその過渡的なものと考えられる。

C類は遺物が少ないので詳細は不明であるが、黄島貝塚でAbやBaなどとともに出土している。周辺地域の例では奈良県大川遺跡（註21）、大阪府神宮寺遺跡、兵庫県別宮家野遺跡などではネガティブな押型文に伴って少量ずつ出土している。従って近畿・中国地方では押型文の古い段階から存在するが、量は少ないと見える。

D類の複合鋸歯文は黄島貝塚ではAbやBaなどに伴出する。香川県小豆島貝塚（註22）においても一例出土しており、AbやBaに伴っていた。

E類は石山貝塚で穂谷式（註23）と言われたものに類似する。石山貝塚においては高山寺式と同一層位より出土しているが、高山寺式よりは後出のものと考えているようである。標式遺跡の穂谷遺跡から數片しか出土しておらず、型式内容は不明な点が多い。

E類に類似したものは岐阜県上野遺跡（註24）、高知県城ノ台洞穴（註25）、兵庫県神崎山遺跡（註26）、野原遺跡群（註27）などで認められる。ただこれらのものが坪井清足氏の言う穂谷式かどうか判断しかねる。また九州の手向山式土器（註28）ともよく似ている。このE類が高山寺式の時期あるいはそれより後出のものだとすれば、これまでの押型文の変化からは全く様相を異にしている。

第二群土器は桶口清之が小豆島式土器（註29）と言ったもので、瀬戸内海沿岸部の押型文土器に伴出するものである。黒島貝塚の発掘において、下層ではほとんど伴出しなかったのであるが、上層のBbなどには多量に伴い、さらに上層では第二群土器だけが出土している。この第二群土器は瀬戸内沿岸部に多く認められ、県北山間部では殆ど存在しない。わずかに金鶏塚（註30）において1片知られているのみである。

第三群土器は黄島貝塚や野原遺跡群などで出土しているが例は少ない。広島県の宮脇遺跡（註31）でも少量押型文土器に伴って出土している。押型文の時期でも新しくない時期に少量ずつ伴出するものと考えられる。

以上のことをまとめると、近畿地方において押型文土器の最古型式とされている神宮寺式・大川式に伴う若干の山形文、あるいは帝釈峠観音堂19層下出土の山形文の存在から、Aaは現在までのところ県内の押型文土器の中では一番古い時期のものと言えよう。神宮寺に代表されるネガティブな押型文土器は県内では全く発見されていないが岡山県境に近い鳥取県日南町（註32）、あるいは広島県馬鹿貝塚（註33）などで断片的に出土しているので今後発見される可能性は強い。

Aaの次は古くから黄島式と言っていたものであるが、決して単純な様相ではなく、同時期と思われる遺跡においても、また地域間においても器形・文様に差異が認められる。しかし現在ではこれを分類することはできないように思われ、Ab・Ba・C・D・第二群土器・第三群土器で構成され各々の量も変化する。この内第二群土器は県北では全く伴出せず、県南では多量に伴出するが、時期により伴出量あるいは器形の大小差が認められる。

次に黄島式とBcとの過渡的なものが存在する。帝釈峠馬渡3層上に代表されるようなもので、黒

島貝塚上層のものがこれに相当する。Bb・第二群土器で構成されるが、南部では第二群土器の量はさらに多く伴出し、県北では第二群土器はない。

次にBcがくるが、県南では殆ど存在しないようである。高山寺貝塚では他の押型文は伴出しなかったようであるが、竹田遺跡ではBcに粗雑な各種の押型文が伴出したと言われているが、詳細は知りえない。またこの時期に瀬戸内沿岸では遺物が殆どないことから、遺跡が存在しないのか、それとも小島島や黒島の最上層で無文土器だけの層があったことから、県南ではBcの直前か同時期に第二群土器だけの時期があったことも考えられる。ただ最近、県南の内陸部でBcが発見されており、今後明らかになるであろう。

E類の土器はBcと同時期かあるいは第四群土器との間にくるものか断定しがたく、今後の資料の

		�冈山県	近 藏 (註 34)	鎌木・高橋 (註 35)
早 期		Aa C ? Ab Ba C D 第二群土器 Ab ? Bb 第二群土器 Bc E 第六群土器	神宮寺 大川 (尾上) (福本) 高山寺 穂 谷 石山 II 石山 III 石山 IV 石山 V 石山 VI 石山 VII	畠の浦 A ? 黄島 畠の浦 B ?  羽島下層 I (前期?)
前 期	7	第五群土器		
羽島下層式				羽島下層 II

表3 類別対比表

増加をまつ以外にないと考える。

以上分類した類別で波張崎遺跡II層出土土器を検討すれば、Ab(第5図1~6)とBa・Bb(第5図7~26、第6図27~35)、そして第二群土器(第6図36~41)が認められる。これらの土器は類別の前後関係で検討したように、このような組合せをもつものは黄島式の時期に近いと言えるであろう。ただ類別された土器の占める割合が、一般的に黄島式の段階では押型文土器と無文土器では50%ずつ、楕円文と山形文の比率も50%ずつ(註36)であるのに対し、波張崎遺跡では80%以上も楕円文が占めている。山形文の少ないと言うことが、新しい傾向であるのかどうかはまだ断定できないが、楕円が粗大化するに伴い山形文が減少してくる事は事実である。したがって黄島式の中でも新しい様相であり、帝釈峠馬渡3層上に相当すると考えられる。

## II. 碓群と遺跡の立地

今回の調査は狭い範囲ではあったが、碓群を検出した。県内では縄文早期の碓群の発見例はないので比較できないが、近くでは奈良県の大川遺跡、兵庫県の神鍋山遺跡などで検出されている。これらは焼けているものが多く、炉跡あるいは調理用である可能性が強く、基本的には先土器時代に検出されている碓群と機能的には変わらないものと考えられる。今後の類例の増加を待ちたい。

一般的に瀬戸内海沿岸島嶼部にある早期の遺跡は、現在では海に突き出した台地上、あるいは内海に浮かぶ小島の台地上に多く認められる。波長崎遺跡もこうした立地条件と同様である。またこれら早期の遺跡の立地する場所には多くの場合先土器時代の遺跡も重複していることがあり、生活条件の類似性が想定される。

## III. 瀬戸内海沿岸部の遺跡群

岡山県という行政区画で区切られた地域の遺跡分布をみると、県南では瀬戸内沿岸島嶼部、特に児島の南側に集中し、県北では三大河川の上流部にそれぞれ集中している。波張崎など南部の遺跡群は貝塚を形成するものがあることから何らかの形で海と関係をもっていた集団と考えられる。これらの遺跡は現在では海に面しているが、当時は一部はまだ陸化していた瀬戸内海を見下す台地、丘陵上に位置していた。このことは黄島貝塚や黒島貝塚、波張崎貝塚（遺跡の中に含まれている）などでヤマトシジミの貝層が認められることから証明されよう。つまり現在の旭川・吉井川あるいは高梁川の一部は児島の北側で合流し、児島の東端、つまり波張崎遺跡の沖合と犬島の間をぬけて東へ流れていると考えられ、黄島・黒島付近が河口に近い所であったと想定される。しかし海進はやがて黄島・黒島周辺においてハイガイが採集できるまでに進行しており、島嶼部では孤立化が始まり、やがて早期末までには児島も島となってしまう。このような自然環境の変化に応じ、この地域の遺跡は黄島式を最後として減少してゆき、第四群土器を出土する遺跡は全く存在しなくなる。これは著しい海面の変動が、集団を移動させたものであろうか。これとは対象的に県北山間部では高山寺タイプの押型文土器や、第四群、第五群土器を出土する遺跡が増加するという相互補完の傾向が指摘できる。このことが偶然であるかどうかは今後の研究に持ちたいが、海面の変動は多少なりとも魚貝類にによっていた南部の集団に影響をあたえ、さらに海に孤立したことから周辺の狩猟場所はなくなり、これまでの集団を維持することが困難になったと考えられる。したがって彼らは安定した地域への移動をよぎなくされたと考えられないだろうか。

（註1）伊藤忠志「押型文を出せる備前黒島遺跡」考古学9-3 1938

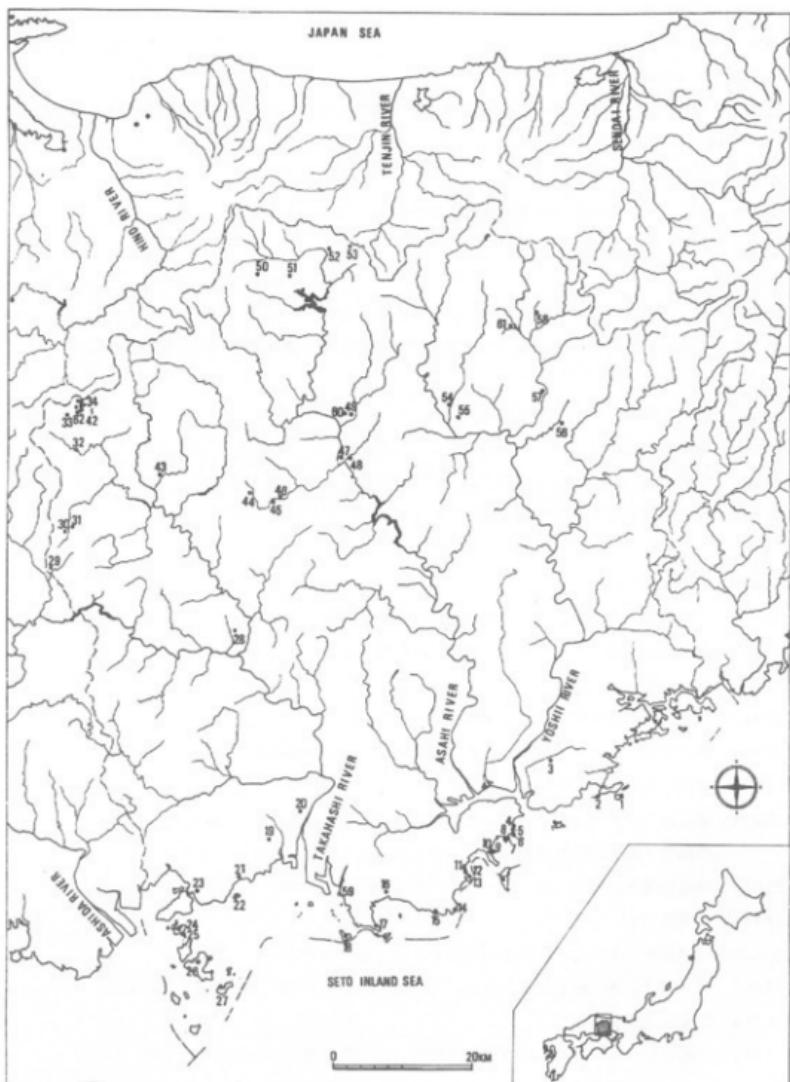
（註2）鎌木義昌「備前貢島貝塚の研究」古備考古77 1949

（註3）鎌木義昌「吉備地方における早期縄文式土器の変遷について」土18 1951

鎌木義昌・木村幹夫「各地域の縄文式土器・中国」日本考古学講座3 1956

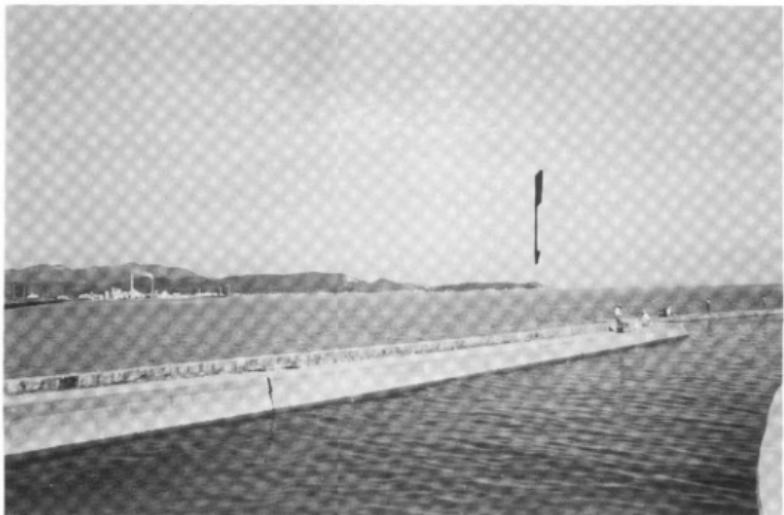
鎌木義昌・高橋謙「縄文文化の発展と地域性・瀬戸内」日本の考古学Ⅱ 1965

（註4）山内清男「縄文土器型式の細別と大別」先史考古学1 1937



第8図 岡山県の縄文時代早期遺跡分布図  
(8. 波張崎遺跡)

- (註5) 註3と同じ。
- (註6) 註3と同じ。
- (註7) 註3と同じ。
- (註8) 河瀬正利「中国山地帝釈峠遺跡群における縄文早期文化の二・三の問題」考古論集  
1977
- (註9) 註3と同じ。
- (註10) 浦宏「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」考古学 10-7 1939
- (註11) 註3と同じ。
- (註12) 註3と同じ。
- (註13) 桜井敬夫「神宮寺早期縄文遺跡」交野町史 1963
- (註14) 兵庫県関宮町教育委員会「別宮家野遺跡発掘調査」関宮町埋蔵文化財調査報告 2  
1972
- (註15) 松崎寿和編『帝釈峠遺跡群』 1976
- (註16) 註1と同じ。
- (註17) 註10と同じ。
- (註18) 坪井清足他『石山貝塚』 1956
- (註19) 註2と同じ。
- (註20) 註15と同じ。
- (註21) 酒説仲男・岡田茂弘『大川遺跡』奈良県文化財調査報告 2 1957
- (註22) 櫻口清之「譜絃小糸島貝塚の研究」史前学雑誌 8-1 1936
- (註23) 註18と同じ。
- (註24) 大江「飛驒の考古学 I」 1965
- (註25) 関本健児「各地域の縄文式土器・四國」日本考古学講座 3 1956
- (註26) 神鍋山遺跡調査団『神鍋山遺跡』 1969
- (註27) 安東信「野原高原採集の縄文遺物」倉敷考古館研究集報 8 1973  
竹田勝「野原遺跡発掘調査報告」岡山県埋蔵文化財報告 7 1977
- (註28) 寺師見国「南九州の押型文土器」古代学 2-2 1953
- (註29) 註22と同じ。
- (註30) 近藤義郎「美作金鶏塚発見の押型文土器」瀬戸内考古学 2 1958
- (註31) 豊元国「備後官脇石器時代遺跡について」吉備考古 77 1949
- (註32) 安東信氏採集による。
- (註33) 松崎寿和他「松永市馬取遺跡調査報告」広島県文化財調査報告 4 1963
- (註34) 岡田茂弘「縄文文化の発展と地域性・近畿」日本の考古学Ⅱ 1965
- (註35) 鎌木義昌・高橋謙「縄文文化の発展と地域性・瀬戸内」日本の考古学Ⅱ 1965
- (註36) 註2と同じ。  
立命館大学史前学会「瀬戸内海黄島貝遺跡発掘概報」日本史研究 11 1949



1. 遺跡の遠景（西南から）



2. 遺跡の遠景（北東から）

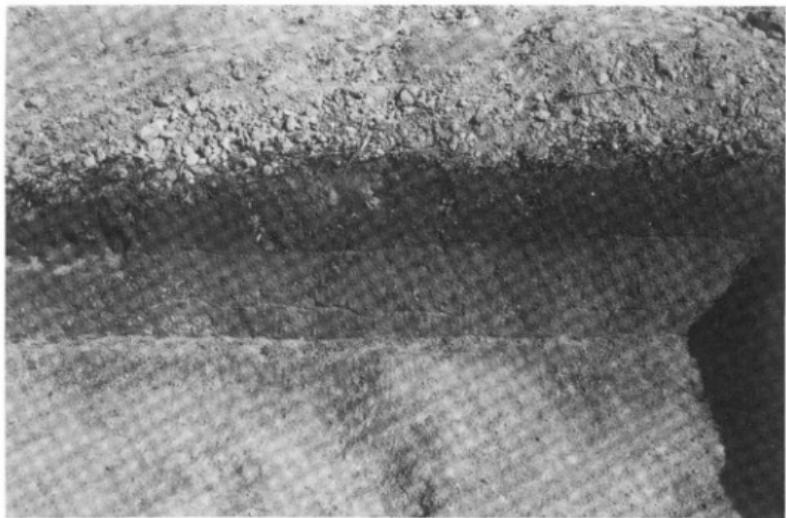
図版 2



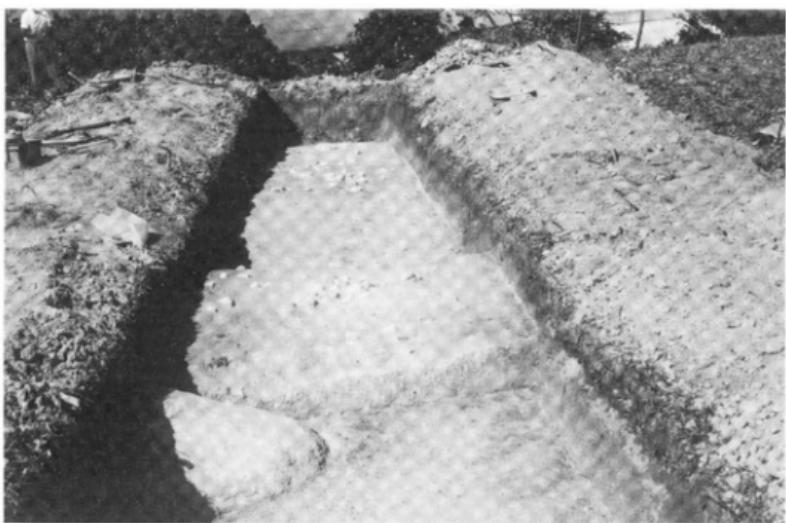
1. 遺跡の近景（東から）



2. 遺跡の近景（西から）

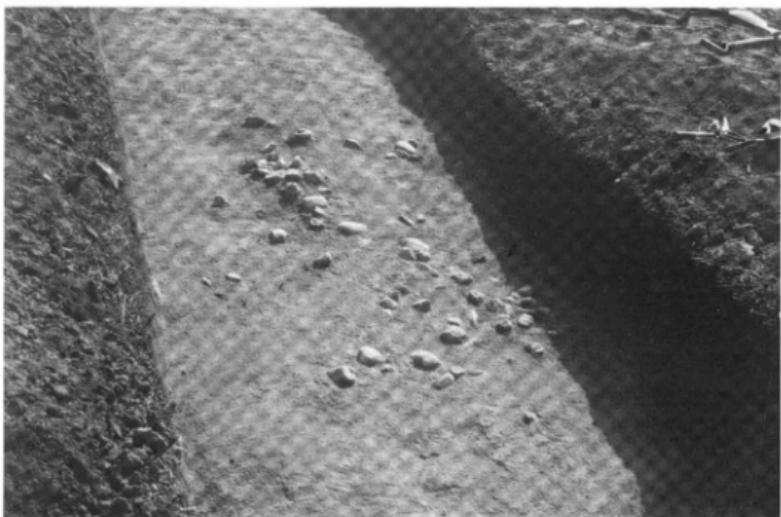


1. トレンチ断面（北西から）

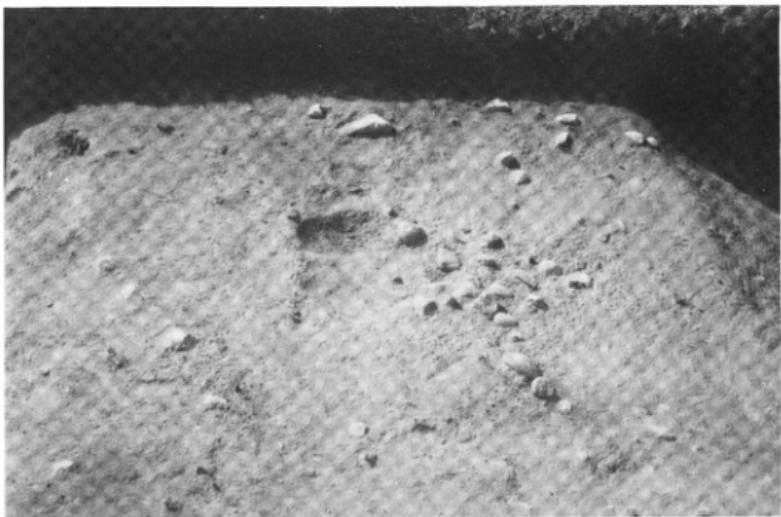


2. トレンチ全景（南西から）

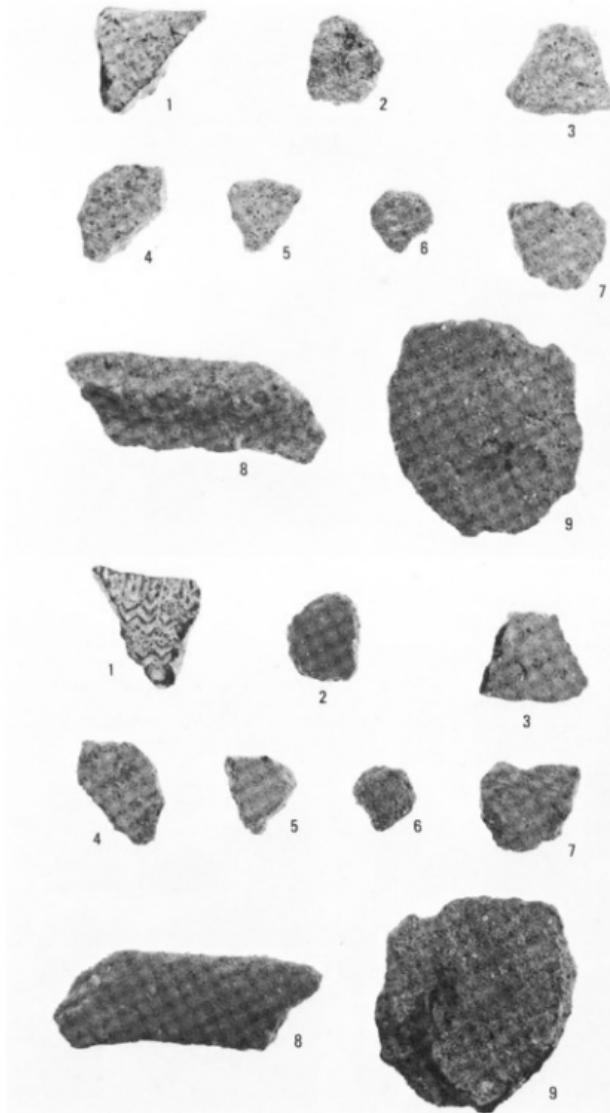
図版 4



1. 碓 群 2 (北東から)

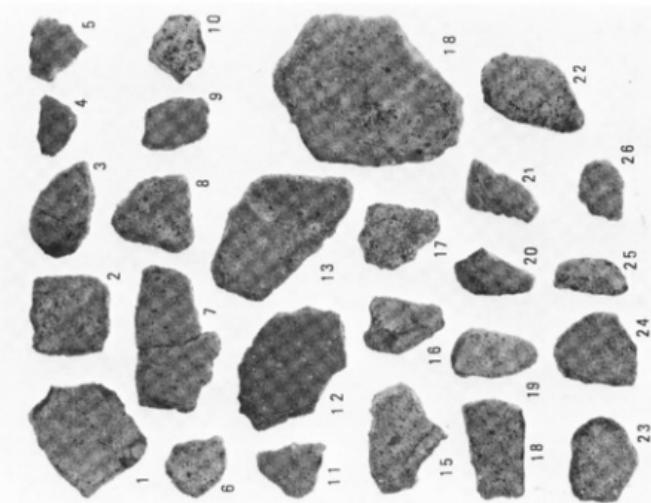
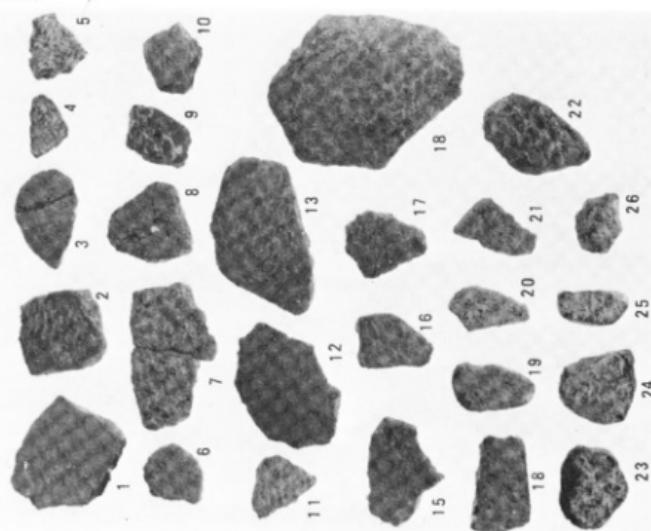


2. 碓 群 1 (南東から)

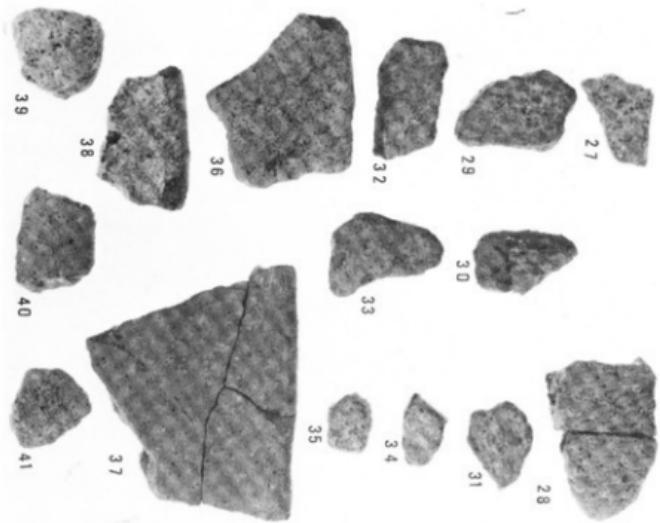
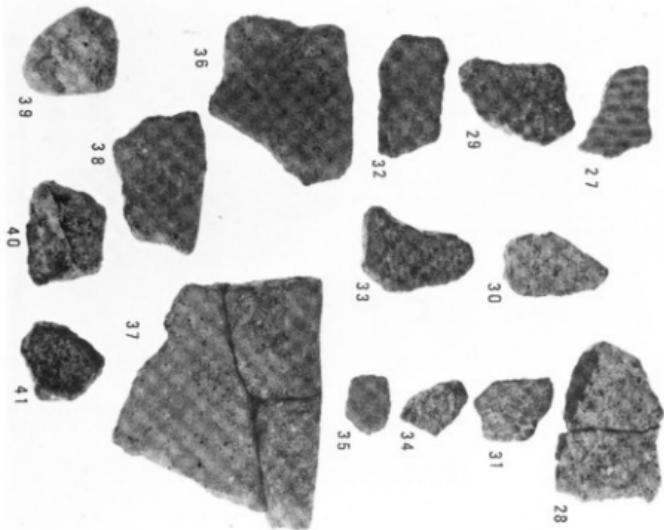


I. 表土層出土の土器 <上表・下裏>

図版6



I. II層出土の土器(I)(上表・下裏)



I, II層出土の土器(2)〈上表・下裏〉

图版 8



2



1

